

久保貞次郎論——創造美育活動初期まで

太田 將 勝*

(平成13年7月19日受理)

KEY WORDS

20世紀美術 twentieth century art

児童画研究 a study on juvenile pictures and drawings

美術教育 art education

はじめに

1930年代から第2次世界大戦の戦中戦後をはさみ、90年代末に至る約半世紀の間、広義のリベラリズムと美術教育の推進と指導を通し、その透徹した思想と主張を貫いた久保貞次郎の生涯は、まことに稀有なものであるといえよう。いわば普遍的な真・美の基準を持しつつ、公平・公正の精神に徹し、偽善・欺瞞の駭りのない言説や行為、運動に終始しえたことは、まことに驚嘆に値する。

氏の没後4年有半を経過した今、久保佳世子夫人、久保・小此木両家、関係の方々との協力を得、現時点で押さえられる広汎な資料を収集しつつ、その思想と実践の意味とを掘り下げ、氏の運動の意義を総合的にふりかえることは、おそらく時宜にかなったことであろう。

本稿は、そうした構想・方向にもとづき、氏にかかわる伝記的事実を巨細にわたってながめながら、困難な時代を背景に所信を貫いたその生涯と思索の跡を永劫にどめようとするものでもある。

1

久保貞次郎(くぼ・さだじろう)は、1909年(明治42)5月12日、栃木県足利市通り五丁目3194番地に、小此木仲重郎(38歳)、ヨシ(28歳)夫妻の第3子・次男として生まれている。家族は、祖母・ワエ(57歳)、父母、姉・とう(9歳)、兄・平太郎(3歳)がおり、3年後には弟・眞三郎が生まれた。⁽¹⁾

「久保」姓は、1933年(昭和8)貞次郎が24歳の時に、結婚して継いだ夫人の姓であり、貞次郎の生家は上記・足利市通り五丁目(旧地名・本下町)で金物店を営む小此木(おこのぎ)家であった。

家伝によれば、小此木家の遠祖は群馬伊勢崎の出と伝え、足利の同家菩提寺・長林寺の過去帳によれば、寛文年間(1661~1673)、すでに同家遠祖の法名が認められる。地域の旧家として、公金の出納や金融にも携わった同家は、貞次郎の父・仲重郎が母・ヨシの婿に迎えられた1897

* 芸術系教育講座

年（明治30）頃以降、金物を販売する商店を営むこととなる。

父・仲重郎は、群馬太田の在・矢田堀の農家に生まれているが、青年時代、埼玉古河（こが）の老舗「八百藤」（やおとう）に金物製造の修行に出、ここで工人としての素養と信用とを築くに至った。その実直にして温かな仲重郎の姿は、同じ頃、小此木家の家督娘の婿探しをしていた同家やその姻戚筋「八百藤」の経営者らの眼にとまり、やがて小此木家の婿として迎えられるに至る。⁽²⁾

仲重郎は文字通り温厚篤実、職業人としてもきわめて有能な人であり、この仲重郎の力量を頼んで、以後小此木家では、広義の「金物」の販売を業とする商店を営むこととなるのである。同家では、釘ボルトなど建築小部材や鍋釜鋏などを扱い、代々その暖簾を継承して、今日も足利の老舗としても知られるようになっている。

母・ヨシは生来蒲柳の質であったが、貞次郎の弟・眞三郎を生んで間もない1911年（明治45）他界し、その3年後、仲重郎は喜与を後妻に迎えた。

継母・喜与は、旧家の家政をあずかるに足るしっかりした性格だったというが、家内や店にかかわる仕事をてきぱきこなし、貞次郎を含む4人の子どもたちについては淡々と接し、種々雑多な家事やまだ幼なかつた末子の眞三郎の保育については、長女・とうとの話合いを通して進めていた。

2

貞次郎は、幼少からやさしく、おとなしい、穏やかな性格の子どもでもあったと伝えられる。どんな時にも、生意気な、険しい態度を取ることをしなかった。

実母を失った多少変則的な家族環境にあって、安定した性格の姉、やや放縦な兄、神経質で格別学業優秀な弟との間に生れ、貞次郎は公正で実直温かな性格の人に成長した。

貞次郎の丁寧な物腰・態度といったものは、家族・親族に対しては勿論、友人・知己に対しても、生涯少しも変わるところがなかった。

1916年（大正5）4月、貞次郎は生家に近い足利尋常西小学校に入学し、22年（大正11）3月、同校を卒業している。同年4月、栃木県立足利中学校（旧制）に入学し、27年（昭和2年）3月、同校を卒業した⁽³⁾

足利中学時代の貞次郎について、級友の1人は、「穏やかな性格。いつも人には陰ひななく、平等に接した」と語る。中学時代の学業成績は良好。4、5年生では欠席もあって、多少席次は下がっているが、いわゆる優等生タイプであった。⁽⁴⁾

中学卒業後、ただちに成蹊高等学校（旧制）高等科文科甲類への入学を果たしたが、この「成蹊」は、大正デモクラシーの文化的動向の中で創設された有数の私学である。既存の官立高等学校が選良養成を目指す国家主義的色彩を多かれ少なかれ潜在的に秘めているのに対し、リベラルな自由な校風を創立以来の特色とし、都下吉祥寺の広大な校地に、学舎と寮など附属施設を併設し、尋常科4年、高等科3年の課程を合わせもつ旧制7年制高校であった。⁽⁵⁾

貞次郎の高校在学中の特筆すべき出来事の第一に、国際語エスペラントの学習開始が挙げられる。入学と同時に、学寮・守之寮に入寮。11月、寮舎監・三上英生を、12月、寮友・川俣浩太郎を知り、こうした交友を通して、エスペラントの習得に向け学習する機縁が生まれた。翌年4月、日本エスペラント学会に入会、一時中断されていた東京エスペラント連盟の復活に際

し、貞次郎は成蹊高校代表として連盟関連の活動を始めた。言語の習得の進んださらにその翌年9月、第17回日本エスペラント大会の1セッション・東京学生エスペラント連盟弁論大会において「学生の国際的友情」について論じている。⁽⁶⁾

1930年（昭和5）3月、成蹊高等学校を卒業し、4月、東京帝国大学文学部教育学科に進学した。大学在学中もエスペラント関連の活動を熱心に推進し、日本エスペラント学会機関紙“La Revuo Orienta”の海外報道セクション編集・執筆の任に当たった。翌年1月、日本エスペラント学会評議員にも選出されている。

1932年（昭和7）6月、東京学生エスペラント連盟第10回総会において、壇上で自らの所信を述べ、10月、第20回日本エスペラント大会（東京）では執行部として会の推進に尽くした。⁽⁷⁾

貞次郎が学んだ成蹊高等学校の自由な校風、そこでの師弟・友人関係、国際語エスペラントとの遭遇は、貞次郎をして人間の心の解放、国境を超えた真の普遍に向かわしめたその生涯の方向の決定に、有効な動機づけの1契機として働いているようである。

3

1933年（昭和8）3月、東大教育学科を卒業し、無試験検定で師範学校、中学校、高等女子学校の修身、英語の教員免許を取得した。卒業論文は理科教育についてであったが、やがて彼の関心は学校教育からもっと広い社会教育へ、さらには個別の教科から総合的・横断的な芸術へと移ってゆく。⁽⁸⁾

大学卒業の年4月、貞次郎は、社会教育への関心から、大日本連合青年団の社会教育研修生となっている。1年間の研修を終えた翌年（昭和9）4月、東大旧制大学院に入学し、社会教育を専攻分野に選んでいる。が、貞次郎の関心はエスペラントの活動やアメリカ視察、芸術思潮や画家との交流・接触を経、20世紀美術や児童画研究へと徐々に推移していった。

社会教育研修中の1933年（昭和8）11月16日、貞次郎（24歳）は栃木県真岡町荒町の素封家・久保善郎の長女・佳代子（20歳）と結婚し、以後、久保姓に改めた。新居を東京市牛込区佐土原町の久保家別邸に定めた。

その後の貞次郎の、戦前は主としてエスペラント、戦後は美術教育にかかわる旺盛な活動は、婚家や夫人の協力を得て展開した。1930年代に海外視察を2度行い、世界の一級美術品の収集、ギャラリー増設、常時食客を抱え、長年月頻繁な来客にも対応できたことは、婚家と夫人の理解あってのことであろう。

1934年（昭和9）6月、日本エスペラント学会の教育分科会代表に選ばれ、翌月、第1回日米学生会議教育分科会（会場・東京・青山学院）に出席している。10月、第15回赤十字国際会議（東京）席上で来日外国人に取材し、同学会誌“La Revuo Orienta”に関連記事を執筆・掲載している。

この大学院の在学中に、貞次郎ははじめて外国旅行を経験した。1935年（昭和10）7月28日、アメリカ合衆国オレゴン州ポートランド市で開催の第2回日米エスペラント学生会議（会場・リードカレッジ）に出席し、会期終了8月4日までを同地に過ごし、この会議の文化部・部長を勤めた。

8月5日、カリフォルニア州に移動、8日サンフランシスコ、9日ロスアンジェルス、24日再びサンフランシスコに戻り、9月6日帰国の途についた。21日横浜に帰港している。

アメリカまでの旅程の往復は航路、大陸内の移動はおおむね汽車によった。旅費・滞在費は婚家が負担した。日本国内で習得したエスペラントや英語での会話、文献資料を通して得た国際感覚は、彼の地において十二分に発揮され、滞在中170人に近いエスペランティストとのきめ細かい交流を実現した。帰国後もエスペラント関連の活動を続行している。

同年11月16日、日本エスペラント学会特使として、東京を発ち、九州各支部を訪問した。27日小倉、28日福岡、29日佐賀、30日長崎、12月2日久留米、4日大牟田、5日熊本、6日人吉、7日鹿児島、8～9日宮崎、10日別府、11日行橋、12日飯塚、13日直方と回ったが、宮崎では、郡司君子宅で画家・杉田秀夫、後の瑛九に会見している。郡司君子は当時の宮崎エスペラント協会代表だった眼科医・杉田正臣の姉。秀夫は正臣の弟であった。この後、14日広島を経て15日帰京した。

翌1936年（昭和11）2月10日、日本エスペラント学会事務局（本郷区元町）において杉田秀夫と再会、翌11日貞次郎は自宅（牛込区砂土原町）に杉田の訪問を受け、以後交流を開始した。直後貞次郎は画家・オノサト・トシノブと相諮り杉田に「瑛九」と命名、早速「瑛九フォト・デッサン展」（会期：4月6日～10日、会場：銀座紀伊国屋ギャラリー）を企画した。貞次郎が美術に格別関心を示し始めたのはこの頃からである。

1937年（昭和11）久保家が真岡小学校に講堂を寄付することになり、貞次郎の発案で建物の設計はフランク・ロイド・ライトの高弟・遠藤新に依頼している。翌38年（昭和12）4月、後に「久保講堂」と呼ばれる講堂竣工を記念し、実弟・小此木眞三郎の師・羽仁五郎の提案により「児童画公開審査」を開始、審査を、川俣浩太郎、古谷荘一郎、吉田唯一に委嘱し、貞次郎、眞三郎も加わった。同じ頃、瑛九は貞次郎の真岡の家に折々宿泊し、のち長期滞在している。

この1938年（昭和13）、「泰西名画複製品展覧会」（会期：5月20～22日、会場：宇都宮市下野新聞社社屋）を企画、併せて自らのコレクションの一部を公開し、足利、佐野、栃木、真岡の巡回展示を実施した。

同年6月、瑛九や小熊秀雄にすすめられ、小熊の導きで豊島区長崎仲町の自宅に画家・北川民次を訪ね、その後の長い交流・交誼が開始された。この北川との接点が後にも記すとおり、貞次郎のその後の方向を決定する第二の大きなファクターとして働いた。やがて、貞次郎は美術への関心を深め、美術教育を生涯の仕事に選んだ。⁽⁹⁾

4

1938年（昭和13）8月、アメリカ合衆国・ヨーロッパへの旅に出かけた。この2度目の海外旅行は、翌39年（昭和14）5月まで9か月間の長期の旅であったが、児童画や西洋美術の研究・視察を主たる目的とし、各国エスペラント協会やエスペラント関係者への訪問は第2義的目的とされた。貞次郎は、欧米の子どもの絵との交換を予想し、日本の子どもの絵3000点を携行した。

この旅行では、実弟・小此木眞三郎と妻の弟・久保汎の2人を同行したが、アメリカ史を修めた実弟・眞三郎、法律を学んだ義弟・久保汎、それぞれが欧米の文化や風土について関心をもち、3者とも語学は堪能だった。全旅程に係る経費は婚家が負担した。

8月8日横浜港を発ち、航路アメリカに向う。サンフランシスコで同地美術協会員としてすでにアメリカ南部で知られた日本人画家ヘンリー・杉本の個展を見、北川民次の紹介で杉本に

会った。この杉本の協力で、サンフランシスコ、シカゴ、ニューヨークなどの学校、児童画塾の作品を収集した。16日ワシントン大学を訪ね、同大学夏期大学講師としてシアトル滞在中のアメデオ・オザンファンとも会った。9月20日、ウイスコンシン州タリエッセンにフランク・ロイド・ライトを訪ね、27日頃ニューヨークに移り、アーティスト・ kongress 副会長でニュースクール・フォア・ソシアルリサーチ教授として名声のあった国吉康雄に会えた。国吉の協力で、ニューヨークの私立小学校リトル・レッド・スクールで日本児童画展を開く。10月、ニューヨーク市マディソン・スクエア・ガーデンでのスペイン政府激励集会においてハラルド・ラスキンの講話を聴いた。

航路、ヨーロッパに移動し、11月、ロンドンではイギリス・エスペラント協会を訪れ、ロンドン近郊在住のカミーユ・ピサロの長男ルシアン・ピサロを訪ねた。ロンドン周辺の学校の美術教室を訪ね、作品を収集した。11月末、実弟・眞三郎はひとり帰国。以後義弟・汎との2人旅となったが、英仏、希伊間は航路。その他のヨーロッパでの移動は汽車、近距離は自動車によった。

12月、パリに移り、ソルボンヌでのフランス・エスペラント協会の集会で、カミーユ・ピサロの次男ルドビコ・ピサロと会見。明るる39年（昭和14年）1月、オシップ・ザッキンを彼のアトリエに尋ねた。この頃、ヨーロッパ全国各地の学校や教師に手紙を書き、日本の子どもの作品を送り、ヨーロッパの教師たちの指導になる児童画を送ってもらった。

2月、再びロンドンに移動、2月11日、サフォーク州サマーヒルの A. S. ニールを訪ね、さらに再びパリに移動。1週間後、ベルリンに移動。ドイツ・エスペラント協会代表ワルター女史と会見。当時日本で北欧絵画の図版をほとんど見ることができなかったが、アントン・シュロール社発行「ブリューゲル画集」を書肆で見付け、購入した。

2月下旬、オーストリアに移動、ウィーン、ベルンなどを訪問。ギリシャに移動、6日間アテネに滞在。2月末、イタリアに移動、ミラノ、フィレンツェ、ローマ、ブリンジジ、ナポリを訪ね、ナポリでは、ベネデイト・クローチェに会った。3月中旬、ナポリ港を発ち、航路日本に向う。スエズ運河、ボンベイ、シンガポール、香港、上海を経て、5月29日神戸に到着。この旅行で、欧米17か国の児童画3000点を収集し、日本に持ち帰る。

貞次郎滞欧中の1938年（昭和12）12月、真岡では「児童画第2回公開審査」が行われ、瑛九、オノサト・トシノブ、川俣浩太郎、北川民次、木下繁、羽仁五郎、古谷荘一郎、吉田雖一らが審査に関わった。貞次郎は日本不在中、瑛九やオノサト、北川らに、審査事務を托し、留守中実施することを勧めている。

貞次郎帰国後1939年（昭和14）6月、「真岡児童画第3回公開審査」が行われ、北川民次、木下繁、羽仁説子、吉田雖一に、貞次郎、小此木眞三郎が加わった。この後「第4回公開審査」は同年9月頃、「第5回公開審査」は40年（昭和15）秋、「第6回公開審査」は41年（昭和16）秋、「第7回公開審査」は42年（昭和17）秋に行った。

こうした動きの中で、貞次郎は、児童画展覧会を企画。先の海外滞在中に収集した外国の子どもの絵画作品と毎回の真岡の審査で得た日本の子どもの絵画作品とを展覧会の企画に構成したものである。

1939年（昭和14）9月頃、久保コレクション「世界児童画展」を計画し、足利、栃木、佐野、銚子を巡回した。

翌40年（昭和15）には児童画を精選し、久保コレクション「世界児童画名作展」を企画、関

西、福岡、東京を巡回展観した。神戸展－会期：2月初旬、会場：そごう百貨店。大阪展－会期：2月19日～27日、会場：大鉄百貨店。大阪第2展－会期：3月、会場：阪神パーク。福岡展－会期：5月1日～6日、会場：玉屋。東京展－会期：5月21日～28日、会場：日本橋高島屋。これらは、アサヒコども会の主催で開催した。

児童画展はその都度各地で反響を呼んだが、企画者である貞次郎の考えは当時なかなか一般に理解されることはなかった。

児童画の公開審査は戦時色の濃くなった43年以降中断したが、戦後47年（昭和22）栃木県芳賀郡山前小学校や同郡七井小学校での審査で再開された。

5

戦時中、エスペラントは左翼と目され、弾圧されているが、貞次郎は当局を恐れずに活動した。欧米からの帰国後、1939年（昭和14）12月、ザメンホフ祭（会場：東京）で「エスペラント訳聖書のザメンホフ博士原文との相違の内情」と題する講演をした。直後、エスペラントへの貢献者顕彰のための「小坂賞」候補選考委員に委嘱され、41年（昭和16）日本エスペラント学会理事に推された。このあと戦後、46年（昭和21）まで理事、47年（昭和22）監事、79年（昭和54）顧問、89年（平成1）会長、96年（平成7）亡くなるまでその会長の職にあった。

しかしながら、著作の件数や研究会や講演等への関わりから見る限り、貞次郎のエスペラントへの関与は徐々に稀薄になってゆき、これとは逆に、純粋美術や児童画への関心が高まり、美術教育に係る活動が熱を帯びていった。

この先、1943年（昭和18）9月、貞次郎は真岡の自宅に遠藤新設計による展示室を設け、「久保ギャラリー」と名付け、以後美術運動の一つの拠点とした。同じ頃、貞次郎は瑛九とともに真岡の自宅の食堂入口扉にガラス絵を制作し、セザンヌ作「エスタック風景」（30号）を購入し、これを早速久保ギャラリーに展示している。

1947年（昭和22）春、栃木県図画工作研究会総会において、図画教育について講演し、48年（昭和23）6月、同県河内郡古里白沢小学校において、また同年10月、同県那須郡大田原小学校において、児童画・図画教育についての講演を行った。

1948年（昭和23）7月、久保ギャラリーで児童美術（図画）研究会第1回を開催し、14名の参加者を得、同年12月、真岡町会場にて研究会第2回。以後52年（昭和27）3月の第9回までほぼ毎年開催し、毎回参加者20～40名の規模を持続しつつ、教育現場の教師たちにも少しずつ影響を及ぼし始めた。

1952年（昭和27）5月20日、貞次郎は北川民次と相談しつつ、創造美育協会を設立した。東京台東区の個人宅を事務局とし、瑛九、嘉門安雄、周郷博、瀧口修造、田近憲三、宗像誠也ら24人を委員とした。30～40歳代の比較的若手の画家、美術教師、美術評論家、美術館員、美術史家、教育学者であった。美術や美術教育の本質、児童美術の今後の在り方や方向について、語り合う場が設けられた。

この年、第1回創美全国セミナーが土浦で、翌53年（昭和28）第2回創美全国セミナーが軽井沢で、54年（昭和29）第3回が高野山で、55年（昭和30）第4回が湯田中で、56年（昭和31）第5回が戸倉上山田で、それぞれ毎年8月開催された。第1回70人、第2回300人、やがて参加者は1600人と規模拡大し、教育現場への影響は増大した。

こうした状況に伴い、児童美術研究会は発展的に解消し、上記研究会を含めた創美関連の研究集会在これにとって代わる形となった。

6

1938年（昭和13）の欧米視察旅行中に収集した彼の地の子どもの絵について、後年貞次郎は次のような感想を述べている。

「世界十七カ国の3000枚余の子どもの絵を日本にもってかえって、ぼくは驚いた。かれらの絵が、そのころの日本の子どもの絵に比べて、きわ立って輝いているのであった。それらの作品は、独立の精神をもち、堅固でデリケートで、生き生きとしているのに、ぼくは注目した。かれらは明るく、個性的であった」⁽¹⁰⁾

貞次郎は自らこれを少し深いところで何度も反芻した。子どもの絵は子どもの心の反映であり、それはとりも直さず、大人の世界の鏡である。大人が教師が、真に解放されないかぎり、自由で創造的な精神をもつ子どもが育つはずはない。それに相応しいのびのびとした児童画が生まれるはずもない。大人はさまざまなものに意味なく支配され、苛まれる。芸術は美術は、そうした古い、多くは意味のない権威を見直し、解放と自由を目指すものではないのか。美術教育は、美術を通して大人を教師を解放し、ひいては子どもの心をも解き放ち、真の自由を保障しようとするものではないのか。こうした考えにもとづいて、作品評価の修正を切り口に、いわば過去の保守的美術教育の改善を試みようとしたのが創美（創造主義美術教育、創造美育協会）の端緒であり、その根幹となる精神であった。

「わが国の図工教育界は、子どもの作品の評価の上で、ことごとくまちがいを犯しているという確信のもとに（独断であったかもしれないが）創美をスタートした。子どもの自発性、自由な精神、個性を尊重する態度で、子どもの作品を評価することを主張した」⁽¹¹⁾

こうした着眼・着想を中心に、1952年（昭和27）創美の綱領が制定された。勿論、以下のこの文章も、創美の創始者たる貞次郎自らが起草したものである。

「私たちは子どもの創造力を尊び、美術を通して、それを健全に育てることを目的とする。私たちは古い教育を打破り、正しい考え方と新しい方法とを探求し、進歩した美術教育を確立する。私たちはあらゆる権威から自由であり、日本と世界の同じ考えのものと励まし協力しよう」（綱領より抜粋）⁽¹²⁾

ここには、自由と平等と公正を求める貞次郎の考えの基本が示されている。こうした考えをもとに、欧米と日本のそれぞれ数千点もの子どもの絵を比較して、その分析の結果と所感を次のように述べている。

「日本の子どもの絵について、日本の進歩した美術教師は次のような弱点があると考えている。

1、個性が弱いこと。

- 2, 絵を作りあげようとしていること。
- 3, 堅固な構成力に欠けていること。』⁽¹³⁾

こうした日本の子どもの絵にも、比較的良いものがあり、それらには好ましい「3つの特長」、すなわち、「忍耐強く、長い時間をかけて制作」したもの、「デリケートな傾向」のもの、「装飾性に富んでいる」もの、があると貞次郎はいう。しかし、「長い時間をかける」ことは、仕事が「工芸的」「羅列的」であり、「ダイナミックな創造力を必要としない」ことが多いとし、「デリケート」であることは、それ自体「文化の価値」があるが、折々「恐れを内部に」持っていることも多く、好ましくない。「強靱な精神に支えられたデリケートさ」こそが「貴重」という。「装飾性」は、「実生活から離れている」こと。「美を現実的なものとして把握しない」で、「美のための美」をつくる傾向があり、問題を孕むとする。これは「日本人がせまい範囲の美ととりくんでいる証拠」。「日本の子どもの絵もはばのせまい美を追求している点に魅力もあるが、弱々しさが伴う」と述べる。

そこには、関係教育団体との活動上の論争の争点となった数項目があからさまに披瀝されている。

このうち1969年(昭和44)、貞次郎は次のような要項11項目に創美に関する自らの考えを整理し、創美のメンバーたちに、プリント「創造美術教育の主張と実践」(要項)として私的に配布するに至る。

- 「1, 子どもの絵の評価を通して、また特に外国と日本の児童画の性質のちがいを研究し、子どもの絵は、自然さ、率直さ、誠実さをめざすべきであること。(中略)
- 2, レインやニールの思想にもとずき、チゼックの考えに教えられ、子どもの美術は、子どもの美的創造力を育てることであり、その作品は年令にふさわしいことが大切であること。
- 3, 教師の指導は間接的であるべきこと。
- 4, 教師と子どもは、権威者と被教育者との関係ではなく、お互いに民主的な関係であるべきこと。
- 5, アルシュウラとハトウィックの研究によって、幼児の絵の表現のうしろにある心理を読みとること。
- 6, 作品のなかに教師は子どものよりよいものをみわけ、それをのばすよう励ますこと。教師の指導は重要であり、欠くべからざること。
- 7, 子どもの個性をみとめながら、集団のかもしだす創造的ふんい気による、集団の影響力を高く認めた。
- 8, 子どもの作品のより正しい評価のために教師が自分の美術上のセンスをたえず訓練する必要があること。公開審査会という形式と児童画の見方のセミナーを数多く開き、評価が独断に陥ることを防ぎ、教師の評価が外形的権威によらず、評価を客観化すること。それにより、より正しい方向に近づけること。
- 9, 子どもの創造力を湧かせるために、教師が新鮮な精神に燃えているべきこと。そのために教師の自己改造、心理的開放の重要性を主張した。
- 10, 子どもの美術が、人類的視野に立って、人間の精神の表現として評価されるべきこと。

教科の狭いわくから、子どもの美術を解き放った。

- 11, 子どもが創造的になるためには、子どもの心を束縛する無意識的抑圧から子どもを解放することが必要。そのために子どもは自分の心のなかに、自由を束縛するものに対し、闘争心を湧かせ、まわりと摩擦をおこし、その精神的緊張のなかに、心の自由を広げてゆく。教師は子どもを無意識的抑圧から解放させるために、子どもに可能な限りの自由を経験するよう励ますべきである」⁽¹⁴⁾

この要項の第1項では「児童画は何を目指すべきか」、第2項では「美術教育とは何か」、第3, 4, 8, 9項では「教師はどうあるべきか」、第5項では「児童画から何を読み取ったらよいか」、第6, 7, 11項では「子どもを創造的にするために、指導上どう配慮したらよいか」、第10項では「教科の枠をどう考えるか」といった課題について、それぞれ関連項目において平明に時に示唆的にまとめている。

先の「日本の子どもの絵の弱点」(24~25頁所収)に掲げられた3つの課題については、この要項11項目は、次のように対応していると考えてよいのではなかろうか。

「1, 個性が弱い」「2, 絵をつくりあげようとしている」については、美術教育・児童画教育の本質に迫る指摘であり、要項1 1項目全般に関連しているように見える。すなわち、こうした状況を解決するためには、子どもが自然に率直に描画を通しての表現活動ができるよう環境を整えることが大切(第1項)。それは、権威や管理的視点から描画を強いるのではなく、教師と子どもが造り出す民主的・創造的な関係・雰囲気の中で、あらゆる抑圧から解放されてのびのび描画できるような状況をつくること(第3・4・7・10・11項)。教師は自らの美的センスの向上や自己改造、心理的解放に心がけつつ、直接自分の好みを子どもに押し付けるのではなく、子どもの良さを伸ばしながら、美的創造力の育成につとめることが求められる(第2・3・6・8・9項)。

「3, 堅固な構成力に欠けている」や「工芸的」「羅列的」「強靱な信念の裏打ちがなされていない」「美を現実的なものとして把握していない」については、文言がやや主観に過ぎ、貞次郎が述べた趣旨や真意をもう少し丁寧に検討してゆかねばならない。これらの事項は、他の美術教育団体の主張・思想との、論争上の発言ともとれる様相も感じられるので、その扱いや文言の解釈は慎重を期したいと思う。この件に関しての結論は後日に委ねたい。(この章終り)

註

- (1) 親族の生没年については、『小此木家先祖調』、長林寺所蔵『小此木家過去帖』、小此木家『除籍簿』等によった。長女・とうの下に、次女・テルがいたが、1905年(明治38)乳児期に死去している。

小此木家や同家系図、貞次郎の幼児期については、小此木伸子氏、高澤君子氏の教示によった。久保家関連の事項については、久保佳代子氏の校閲と指導を仰いだ。

- (2) 関連の遠戚、旧地名、地番等については、小此木熊夫氏の教示によった。
- (3) 貞次郎の在学・修学歴については、足利市立西小学校保管の同校学籍簿、同校卒業生名簿、栃木県立足利高等学校保管の旧足利中学校学籍簿、同校卒業生名簿等による。西尋常小学校関連の事項については、同校校長・山岸修次氏(2001年3月まで在職)、足利中学校関連

の事項については、足利高等学校校長・平野英治氏，同校教諭・河内恒夫氏（美術）の協力によった。

旧制足利中学校では、大正11年4月、109名入学中、成績は1年で最上位。3年まで優等・皆勤。4～5年では欠席があり、上位1割以内。昭和2年3月、5年の卒業時、卒業生は66名であった。

- (4) 足利中学校在学中の事項については、貞次郎姪・小此木伸子氏が本年4月貞次郎の同級生・久保田松三郎氏に聞き取り調査を行った。
- (5) 旧制成蹊高等学校関連の事項については、成蹊学園内「成蹊会」の協力によった。7年制高校であるので、正確には、高等科編入であった。
- (6) エスペラント関係の事項については、(賤)日本エスペラント学会及び同学会事務局長・石野良夫氏や会員・中島恭平氏の協力によった。
- (7) 1933年(昭和8)からエスペラント関連の著作活動が開始され、その活動期間は1937年(昭和12)までの約5年間である。1937年以降は関心が美術、児童画、美術教育へと移り、エスペラント関連の執筆はほとんど見られない。エスペラント関連の著作として判明した主なものは、次の通りである。／1933～34年「エスペラント語学講座」(初心者向)、「エスペラント運動講座」【エスペラント】日本エスペラント学会／1935年4月【エスペラント会話】日本エスペラント学会、11月「共同的文化建設への期待」【第2回日米学生会議報告】／1935年「世界情勢について」【浴恩会報】日本青年館／1936年1月「重任をおびて九州エスペラントの同志を訪ぬ」【La Revuo Orient】日本エスペラント学会、1～2月「巻頭文」【SAMANTO】久保特使宮崎訪問記念号 宮崎エスペラント会、5～6月「日本エスペラント運動の反省」「エス名士はどんなものを読んでいるか」【SAMANTO】、7月「世界文化建設への前進」【日米学生会議準備報告】、9月「Tくんへ」【立正大学新聞】筆名・高谷洋一、11月「青年文化」【立正大学新聞】、11月「エスペラント語の歴史と現状」【鮑薇】12巻11号／1937年6月「未来へ」【La Revuo Orienta】、7月【エドマンズ氏を迎えて】【La Revuo Orienta】、8月「現実の問題」【La Revuo Orienta】、9月「世界教育会議と言語の問題」【La Revuo Orienta】
- (8) 東京帝国大学文学部関連の事項については、東京大学文学部教務掛の調査による。
- (9) 美術・児童画・美術教育関連の著作活動は、1936年(昭和11)頃開始され、没年96年(平成6)まで60年間続けられたが、戦前45年(昭和20)までには、次のようなものがある。／1936年6月「洋画壇への反省・時代の画家瑛九の存在」【立正大学新聞】古谷荘一郎編集／1937年2月「新しい絵画の方向」【早稲田大学新聞】／1938年7月「美術史上の人びと」【立正大学新聞】／1939年8月「イタリアの知性、クローチェ先生を訪ねる」【知性】河出書房、8月「パリの画商」【美之園】、10～12月「世界の児童画」【教育美術】、11月「ミケランジェロの城塞」【日本評論】、「彫刻家ザッキンとの親交」【みづえ】、12月「戦火をくぐるピサロの絵と息子たち」【みづえ】／1940年2月「英国北部への旅」【教育美術】、「欧米の児童画」【帝国大学新聞】、3月「建築の天才 フランク・ロイド・ライト」【みづえ】、4月「青木繁の芸術」【みづえ】、5月「イギリスの友人」【教育美術】、「サマーヒル訪問」【知性】、6月「サンダアランドの子供達」【教育美術】、8月「ブリューゲル“子供の遊び”」【生活教室】富山房、「最近のザッキンとブラックス」【みづえ】、9月「フィレンツェの旅」【みづえ】／1941年1月「ピイタア・ブリューゲル特集」【みづえ】小此木眞三郎共編／1942「ピイタア・ブリューゲル画集」小此木眞三郎と共編春鳥会／1943年5月「創造と教育」【帝国教育】
- (10) 「日本の児童画」(『美育文化』1967年6月)(『児童画と教師』文化書房博文社、1972年)

- (11) 「創美を始めたころ」(『児童画と教師』文化書房博文社, 1972年)
- (12) 『創造美育協会綱領』1952年
- (13) 「日本の児童画」(『美育文化』1967年6月)(『児童画と教師』文化書房博文社, 1972年)
P.46.
- (14) 「創美を始めたころ」(『児童画と教師』文化書房博文社, 1972年) P.30.